水神のルーツと生活文化Ⅱ
——若狭から奈良へ、お水送り神事・お水取り神事の周辺から——

佐　藤　ひろみ

An Origin of the God of Water and the Japanese Culture in its Life-style Part Ⅱ: An investigation of the relation between the Omizu-okuri religious ceremony in Wakasa, and the Omizu-tori religious ceremony in Nara

Hiromi Sato

はじめに

1998年世界遺産に登録された奈良東大寺二月堂の舞台下、良弁杉の下手にある閼伽井屋には、修二会（しゅにえ）の「お水取り」行事で二月堂のご本尊十一面観音にお供えするお香水を汲み上げる井戸がある。その水源は若狭遠敷川の鵜の瀬と通じているといわれ、湧水（閼伽水（あかのみず））は「若狭井」と命名されている。閼伽（あか）とは梵語のアルガの音写で水のことであり、英語のアクアと同じ語源である。

この若狭井の伝説は12世紀前半に編纂された「東大寺要録」に記されており、諸書に引用掲載されている。奈良時代、二月堂の修二会で実忠和尚が神名帳を読んで全国の諸神を勧請したが、若狭の遠敷明神だけが漁に夢中になっていたために遅参してしまい神々の咎を受けた。遠敷明神はお詫びの証として、毎年修二会に若狭遠敷川より香水を送ると誓い、一心に祈念したところ、にわかに二月堂の舞台下の岩が割れて黒白二羽の鵜が割れ目から飛び立ち、傍の樹にとまったとたんにその割れ目から甘露な泉（閼伽水）が湧き出した。そこに石を敷いて閼伽井としたとされる。その清泉を若狭井と命名し、水を汲む行事が始まった。それが全国的に有名な「お水取り」である。その若狭井の水源が、鵜の瀬の水中洞穴から地中の水脈を通って湧き出すといわれている。同じころ鵜の瀬では、川面を泳ぐ鵜の姿が見えなくなり瀬から下流の水が途絶えると伝えられている。（筒井本東大寺要録巻第四　二月堂若狭井に詳しい。図1）この若狭井伝説のもとに、福井県小浜市の若狭神宮寺と若狭井の水源とされる遠敷（おにゅう）川鵜の瀬（名水百選に認定）では、東大寺二月堂の「お水取り」に先駆けて「お水送り」神事が行われている。遠敷明神（若狭彦姫神）の伝説信仰から毎年3月2日の夜、鵜の瀬の水中洞穴のある淵で、根来（ねごり）八幡の神人と神宮寺僧によって厳かに執り行われる。鵜の瀬で遠敷川に注がれる香水は10日をかけて東大寺二月堂の「若狭井」に届くといわれている。

遠敷川鵜の瀬の水中洞穴と東大寺二月堂の若狭井が地下水脈で繋がっているという伝説は、水神のルーツを辿る上でも興味深い。前報では京都鞍馬の貴船神社と阿蘇山上神社（阿蘇神社奥の院）・阿蘇神社に伝わる水の祭祀の周辺から水神の起源を辿り、古代の伝説の神々へのすさまじ

東大寺要録巻第四

一、二月堂

今此堂者。實忠和尚之創草也。凡利益不空。効驗無滯之仁祠矣。觀音大士。普施靈德。現當悉地莫不称遂。是以道俗男女。傾首恭敬。尊卑老少。謁誠歸依。可謂諸佛垂應之所。菩薩遊化之地者乎。天平勝寶四年壬辰。和尚始行十一面悔過。至于大同四年。合七十年。毎年始自二月朔日。二七日夜。修毎日六時行法。（其作法委載別紙）始自天平宝字五年辛丑二月十五日。至于弘仁六年。合六十二年。奉供涅槃會矣。

今聞古人云。實忠和尚。被始六時行法時。二月修中。初夜之終。①讀神名張。勸請諸神。由茲諸神。皆悉影響。或競與福祐。或誹爲守護。而遠敷明神恒憙獵漁。精進是希。臨行法之末晩以參會。聞②其行法隨喜感慶堂邊可奉獻閼伽水之由所示告也。時有黒白二鵜忽穿磐石從地中出飛居傍樹從其二迹甘泉涌出香水充滿。則疊作石爲閼伽井其水澄映世旱無涸。彼大明神在③若狭國遠敷郡。國人崇敬具大威勢。前有大川々水砰硠奔波涌流。由獻其水河末渇盡俄無流水。是故俗人号無音河。云云 然則二月十二日夜。至後夜時練行衆等下集井邊向彼明神在所加持井水。以加持力故其水盈滿。于時汲取入香水瓶不令斷絶。自尒相承遂爲故事。從天平勝寶之比至于今時及四百歳。雖經數百年。其瓶内香水清淨澄潔。④飲者除患者心無惱。犹犹猶如無熱池八功德水矣。

諸院章第四

図1　筒井本東大寺要録巻第四　二月堂若狭井

いまでの人々の豊穣祈願と、古代から現在まで連綿と伝承されている水の祭祀が明らかとなった。そこで今回はそれに続き、福井県小浜市の若狭神宮寺、遠敷鵜の瀬に伝わる「お水送り」神事と1200年余りにわたって途絶えることなく続けられてきた奈良東大寺二月堂の「お水取り」神事について実地見聞し報告する。とくに二月堂に伝わる若狭井伝説をもとに、若狭から奈良へと繋がる水の神事、水の祭祀についての関連性を詳細に検証するとともにその起源についても推論を深めることとする。また実際にそれらが執り行われる遠敷の神宮寺・鵜の瀬と奈良東大寺二月堂を訪ね、収集した記録や資料を整理し生活文化史的・民俗学的視点から考察を進めたい。（写真1～写真3）

1. 若狭・鵜の瀬の「お水送り神事」とは

1）若狭井伝説の水源地　鵜の瀬

若狭井伝説の水源地（福井県小浜市）遠敷の鵜の瀬を初めて訪ねたのは2002年8月。道路沿いに鵜の瀬へ導く鳥居があり、ここから先は送水神事が行われる神域であることを覗わせている。石敷きの河原へ出ると、「お水取り」の水源地とされる遠敷川鵜の瀬の透明度の高い清冽な渓流を目前にする。対岸には注連縄で祀られている大きな岩穴があり、その手前の川の流れが屈曲した淵にある岩場から聖水が注がれる。それが二月堂の若狭井まで送られるといわれている。また

地下の水脈で若狭井と繋がっているとされる鵜の瀬の水中洞穴は、注連縄が張られた岩穴の下方、川面に渦が巻いている辺りの川の中に実際にあるという。また鵜の瀬の河原には、小浜市による鵜の瀬の由緒が書かれている看板があり、奈良と若狭を聖水で繋いだ「お水送り」の伝説を伝えている。『天平の昔、若狭の神願寺（神宮寺）から奈良東大寺に行かれた印度の渡来僧実忠和尚が大仏開眼供養の後に二月堂を創建し修二会を始められた。その二月初日に全国の神々を招待され、すべての神々が参列されたのに若狭の遠敷明神（彦姫神）のみはみえず、ようやく二月十二日夜中一時過ぎに参列された。それは川漁に時を忘れて遅参されたので、そのお詫びもかねて若狭より二月堂の本尊へお香水の閼伽水を送ると約束され、そのとき二月堂の下の地中から白と黒の鵜が飛び出てその穴から泉が湧き出たのを若狭井と名付け、その水を汲む行事が始まった。その若狭井の水源が鵜の瀬の水中洞穴で、その穴から鵜が奈良までもぐっていったと伝える。この伝説信仰から地元では毎年3月2日夜この淵へ根来八幡の神人と神宮寺僧が神仏混淆の「お水送り」行事を行う習いがある。』（史蹟「鵜の瀬由緒記）。前述の若狭井伝説の概要と重複するが、下線部が地元鵜の瀬に伝わる具体的な箇所である。遠敷明神は若狭彦神・若狭姫神の二神の夫婦神である。また川漁は遠敷川で川釣りをしていたという記述も具体的である。鵜の瀬の地名は、昔この川には、鵜の群れが多くみられたことによるといわれている。若狭井に遠敷川の水が湧き出たのと時を同じくして鵜の瀬では、群れをなして川面を泳いでいた鵜の姿が消え、瀬から下流の水が途絶え、川の音もしなくなったと伝えられる。そのことから地元では遠敷川を音無川と呼ぶようになったという。この由緒書きの内容も地元に伝承される箇所以外は、前述と同様に東大寺要録の若狭井伝説に従ったものと思われる。（図1．①②③）（写真4・写真5）

2）神宮寺と遠敷鵜の瀬で執り行われる送水神事

奈良東大寺の「お水取り」に先駆けて3月2日の夜、福井県小浜市の神宮寺と遠敷川・鵜の瀬で厳かに行われる「お送りの神事」は、午前10時から下根来の八幡神宮講坊（八幡宮の最も古い小屋）長床（ながとこ）で行われる山八神事からはじまる。 供物の赤土饅頭をつけた棒で宮役が外陣の柱に勢いよく「山」「八」と書いて豊作を祈願する。午後1時からは神宮寺本堂前では弓打ち神事、弓射大会が行われ、本堂では修二会が錫杖（しゃくじょう）、懺法（ざんぽう）、悔過（けか）の順で行われる。午後6時頃からは火と水の祭祀「お水送り」が始まる。ここからが一般が参観できる行事となる。神宮寺本堂の回廊から赤装束の僧が大松明を振りかざす達陀（だったんとは焼くという意味で焼き払い、焼き浄めること）の行が行われ、境内の本殿前の大護摩に火が焚かれる。参詣者は大護摩から松明に火をもらい、山伏姿の行者や白装束の僧侶を先頭に5,000人にものぼる松明行列が、1.8 Kmほど上流の鵜の瀬へ向かう。法螺貝が吹かれ、近くの山に音がこだまする中での松明行列は、観光的な傾向にあるといわれているが、やはり現場は厳粛で幻想的である。鵜の瀬の河原で護摩が焚かれると送水神事が始まる。水中洞穴のある鵜の瀬の淵の岩場に立ち、白装束の神宮寺住職が祝詞を読み上げ、竹筒からお香水が遠敷川へ注がれる。このお香水が10日かって奈良東大寺二月堂の若狭井に届くといわれ、全国的に有名な二月堂の「お水取り」は3月12日に行われる。

3）神仏混淆の若狭神宮寺

神宮寺内陣・境内の閼伽井と巨木スダジイ

本堂はその背後に竜王の山を神体山として建てられている。1533年朝倉義景の再建によるもので、入母屋、檜皮葺き。本堂の後の本堂内陣は左に薬師如来、右に白石鵜の瀬明神・若狭彦神（和加佐比古）・若狭姫神（和加佐比女大神）などの神々が祀られ、神仏混淆のかたちをとり、神々と仏像の両方が同じ空間にある。神仏両道の寺である。古来の神祇信仰（神道）と大陸伝来

の仏教信仰（仏教）が混淆し融和した世界を創り出している。また境内に湧き出す井戸は二月堂と同様に閼伽井といわれ、お水送りで遠敷川に注がれるお香水はここから汲み上げられる。東大寺二月堂の若狭井（閼伽井）の閼伽井屋と小屋の形も規模もよく似ている。しかし二月堂の閼伽井屋がその建物の周りが厄をはらう大量の榊の枝で厳重に囲まれているのに較べ、神宮寺の閼伽井屋は入り口が開放されており、中の撮影を申し出ると容易に許可された。写真の通り真ん中の大きな岩には注連縄が張られ、滚々と清水が湧き出ていた。置いてある柄杓で飲用したところ、名水百選に指定されている遠敷川鵜の瀬の水脈であろうか、期待通りまろやかなおいしい水である。二月堂のお水取り行のお香水と同様に、神宮寺のお水送りにおいても修二会の行でお香水として本尊に供えられる。また閼伽井の近く本堂の左前方には、樹齢400年というシイの巨木スダジイが立っており、背後の神体山とともに本堂と一体化して境内を神々しく荘厳な神域にしている。この山一帯はその昔、シイの森であったという。水がまろやかでおいしい所以である。

神宮寺の由来と起源

神宮寺寺誌によれば、若狭の語源は朝鮮語ワカソ（ワッソ＝来るとカッソ＝往くとの合成語）が和加佐と訛ってさらに若狭と宛字された地名で、奈良もまた朝鮮語ナラ（国という意味でナラして開けた土地すなわち都という意味）を語源とし後に宛字されたものであるとされている。この地方が若狭の中心で、白鳳時代から拓け、この谷は上陸した半島文化が大和（朝鮮語でナラともいう）へ運ばれた最も近い道であったという。国府のあった遠敷（おにゅう）は朝鮮語ウオンフー・「遠くにやる」が訛ったものとされ、根来（ねごり）は朝鮮語ネ、コーリ「汝の古里」が訛ったとされる。京都や奈良はそこから百キロほどの直線上にあたるといわれる。さらに神宮寺の起源については次のように記されている。

この地方を拓き国造りした祖先は遠敷明神で、その発祥地は根来の白石とされる。都へ近道の起点にこの地をえらび、遠敷明神の直孫和朝臣赤麿公が八世紀初め山岳信仰で紀元前銅鐸をもった先住のナガ族の王を金鈴に表し、地主の長尾（那迦王）明神として山頂に祀られた。その下に神願寺を創建し翌年勅願寺とされた。その頃若狭には悪病が流行し五穀が実らず飢饉が続いていた。赤麿公の祖神の白石明神（遠敷明神）の彦神が人間の姿になって赤麿公の前に現れ前世に殺生をした罪の報いで、今鬼の身に陥り苦悩して暴れるので、その結果悪病を流行させ飢饉が続くのだと告げ、寺院を建て仏像を祭ることを願われたという。赤麿公は寺を建て薬師如来と十一面観音を仏堂に祭り、その秋には紀元一世紀に唐服を着て白馬に乗り影向し、すでに根来白石に祀られていた遠敷明神を迎え、神仏両道の道場にされた。これが若狭神願寺の起源であるという。薬師如来の化身が遠敷明神の若狭彦、十一面観音の化身が若狭姫であるとされている。さらに鎌倉時代初め若狭彦神社の別当寺となって神宮寺と改称したとされる。また神願寺の開祖赤麿公は根来の白石明神に仕えていた秦の常満という長者の神童を大和へ連れて行き義淵僧正の弟子とした。後の東大寺別当良弁僧正である。印度の渡来僧実忠和尚は神願寺から東大寺の良弁の弟子となり、大仏建立を助け二月堂悔過法要修二会の行を創始した。これらの詳細は現在寺を訪れる人々に直に当寺の住職によって法話とともに説明がなされている。筆者の訪問時にも神仏共存の本堂で世界平和を願うお水送りの祈願法話とともに拝聴する機会を得た。鎮座する神々と仏像を祀る神仏両道・混淆の寺の起源は古代にまで遡る。（写真6・写真7・写真8）

4）良弁杉伝説の起源か

二月堂の良弁杉にまつわる良弁杉伝説については、浄瑠璃や歌舞伎の演目となり、今に伝えられている。その生誕伝説には若狭のほかにも志賀（滋賀県）や相模（神奈川県）の生まれである

など諸説が推論されているが、幼児期に鷲にさらわれて良弁杉で弄ばれていたのを、そこを通り掛かった名僧義淵に助けられ、後に東大寺の高僧になられたという話のルーツと考えられるものが若狭神宮寺の寺誌に載っている。「神願寺の開山赤麿（和氏）公は白石の長者の神童（幼児）を大和の伴い、当時の名僧、義淵僧正（大樹）に託され、後に東大寺開山良弁僧正になられた。神願寺へ渡来した印度僧実忠和尚が良弁僧正を助けて東大寺を完成し、さらに二月堂を建て修二会のお水取り行法を始められた。」記述の中の神願寺（現神宮寺）を開山した赤麿公（遠敷明神の直孫とされる）が和氏＝鷲で、白石の長者の神童が（幼児）＝良弁であり、名僧義淵僧正が大樹＝良弁杉であるという推論が成り立つわけである。現在でも根来白石には良弁の直系といわれる原家が存続しており、送水神事が行われる鵜の瀬の付近の山一帯を管理し、良弁僧正を奉っている。送水神事が行われる鵜の瀬のすぐ近く100 mも離れていない所に「良弁和尚生誕之地」の石碑（写真9）が建っておりこの地が良弁僧正の故郷であることを示している。一昨年初めて鵜の瀬を訪ねた際には鵜の瀬資料館長で良弁の末裔といわれる原井太夫氏に会う機会を得て、丁寧なお水送りの解説を聞かせていただいた。原氏は鵜の瀬で行われる送水神事の際に、神宮寺僧とともに神人としての中心的役割を果たされている。

5）遠敷明神と遠敷のルーツ

遠敷明神のルーツ

遠敷明神は鵜の瀬（小浜市下根来）の白石の里に、唐服で白馬に乗った姿で降臨したと伝えられる。その降臨地には白石神社が鎮座しており、「若狭一の宮降臨の地。霊域鵜の瀬。若狭彦神社・若狭姫神社・飛地境内」という標識がたっている（写真10）。現在遠敷明神は若狭一宮若狭彦神社（上社）・若狭姫神社（下社）に祀られており、その二神を遠敷明神という。祭神は彦火火出見尊（ヒコホホデノミコト）・豊玉姫命（トヨタマヒメノミコト）で夫婦神である。神話の「海幸彦・山幸彦」の山幸彦夫妻。また若狭にはかつて丹生郡があり、その一宮として遠敷明神と称えられたのかもしれない。

遠敷・赤土・水銀・白・白馬・清浄

遠敷は地名辞典で次のように説明されている。「遠敷は小丹生で、オは美称。ニュウ・ニフは赤土・粘土でフは「～のある所」と思われる。また赤土または水銀に由来するなどの説もある。」お水送りの初めに八幡神宮で行われる山八神事の供物となる赤土饅頭というのは、この赤土であろうか。また遠敷では水銀も採れたようである。東大寺の大仏建立には金が必要で、それを得るためには水銀に金を溶解して大仏に塗布し、熱で水銀を蒸発して金メッキを施したとされているので、その水銀が当地で採れ、その供給源であったのかも知れない。さらにこの作業を東大寺で行ったとすれば、かなりの土壌汚染や地下水汚染が考えられ、清浄な環境に取り戻すためには、遠く離れた水の豊富な若狭遠敷に伝説信仰によって水源を求めたとの推論も全く考えられなくはない。また遠敷明神の降臨についていえば、降臨の際に乗っていたとされる白馬、降臨地である白石、鎮座する白石神社のシロは清浄を意味するという。

6）鵜の瀬資料館 原井太夫氏の話　根来（ねごり）と鯖の運搬

鵜の瀬の資料館を訪ねた際に、お水送り神事についての質問に、詳細な説明をしていただいた鵜の瀬資料館長に、帰り際に差し支えなければと住所を尋ねると「良弁は根来の生まれで私の家から出た人です。」といい根来の原家ものですといわれる。良弁僧正の末裔原井太夫氏である。前に述べたように資料館の右手には良弁僧正の石碑（奈良市長によって書かれた）があり、その奥の山手には一族が丁重に護っておられる墓所があった。資料館にはお水送りの様子を再現した和紙の神人形の展示があるが、お水送りの役を尋ねると岩の上で遠敷川に香水を注ぐ神宮寺住職

の近くで送水文をもっている役が原氏であるという。根来八幡の神人、神宮寺僧のほか京都比叡山からも何人かの僧侶が加わっているとのことで、さらにこの神事を執り行うのは代々その家の継承者である長男に限られているという。原氏は遠敷川の淵から送水神事の行われる岩の下方を指し、遠敷川の流れの下に奈良と繋がるといわれる水中洞穴があるといわれる。水中ではその近くは渦が巻いていて近寄れないのだという。そして東大寺要録の若狭井伝説にみられるように地元では、二月堂の若狭井に湧き出たときを同じくして、この瀬から下流の水が途絶え川面を群れ泳ぐ鵜の姿が見えなくなったと伝えられているという。また原家が存続する根来では若狭で捕れた鯖を村の女達が背負い山の峰伝いに京都へ運んでいた時代があったという昔話を語られた。早朝に若狭で水揚げされた鮮度の良い鯖をその日のうちに都へと届けていたという。いわゆる鯖街道といわれている中の一本が根来から繋がっており、しかもこの街道は他の道に比べ若狭と都を峰伝いの最短距離（鯖街道根来道）で結んでいたのである。しかし峰伝いの道は獣道であり、運搬の報酬は生計が経つほどの高額であったが、山の途中で背負っている鯖を狙う鷲の被害に会い、命を落とすこともしばしばであったという。この鷲の被害についての話は、前に述べた二月堂の良弁杉伝説で鷲にさらわれた良弁の幼児期の説話を想起させるものである。これはまさに当時の権力者赤麿公（和氏＝鷲）に連れられて、都の名僧義淵（大樹）にあずけられ、後に東大寺の高僧になられたという話と通じるものと思われる。この他、氏からは原家と東大寺とのかかわりや、若狭根来の生活に関する話を聞くことができたが詳細は紙面の関係で、送水神事の多くの写真とともに次の機会（第2部報告）にゆずることとする。

2. 奈良東大寺二月堂の「お水取り」と若狭井

1）二月堂の伝説・説話良弁僧正と鷲

東大寺二月堂伝説として良弁杉の説話については、前述の通り浄瑠璃や歌舞伎の演目となり、昔から一般に親しまれている。日本伝奇伝説大辞典によると「本朝高僧伝」「東国高僧伝」に詳しく、人形浄瑠璃では「観音霊験記三拾三所花野山」の一部に構成されている。大正時代からは歌舞伎「二月堂良弁杉由来」の外題で上演され今日に至っている（写真11）。芝居では東大寺の僧正となった良弁は、幼いころ鷲にさらわれ二月堂傍の杉の大木に引っ掛かっていたのを助けられたところから、この木に自ら良弁杉と名付け、30年後良弁杉のもとで母と子は再会するという話になっている。現在二月堂の舞台下の前庭に良弁杉がある。これは昭和36年の台風の時に倒れた大木の枝を挿し木したものであるといわれる。（写真1-①、②）また、二月堂舞台に続く広い石段をのぼりつめた正面には御水舎がある。その唐屋根の梁には良弁の故事を現した、鷲が幼児を掴んでさらっていく様子が彫られている。（写真12-①、②）良弁と東大寺とのかかわりの中ではこの幼少期の話が有名であるが、良弁は奈良時代の華厳宗の高僧で東大寺の開基である。伝説辞典によれば、近州志賀（滋賀県）の人とも相州（神奈川県）の人ともいわれるとされている。5歳から法相宗僧正義淵のもとで学び、英発な才学を示した。のちに新羅僧の審祥に華厳を学び（中略）天平四年に東大寺初代別当となり僧正となったとされる。また良弁は聖武天皇に認められ、天皇の創建である羂索院を賞賜し、宮府からの費用で寺を造営し、羂索院は金鐘寺から東大寺と改められた。さらには若狭神宮寺から来たインドの渡来僧実忠とともに大仏の造立にも加わっている。また遠敷明神が閼伽の水を献じたとの伝説は東大寺要録に記載されていることは前述の通りであるが、実忠により創始された修二会のもとに平安時代にはすでに遠敷神社は二月

堂の近傍に勧請されていたらしい（写真13）。良弁杉の傍の興成社（写真1-②）二月堂南東の飯道社と遠敷社の三社が良弁を奉る開山堂とともに二月堂近傍に鎮座している。

2）修二会（しゅにえ）の由来と行法

修二会とは旧暦の2月1日から14日まで行われていた行事で2月に修する法会ということである。この行法は二月堂の本尊十一面観音に練行衆といわれる11名の僧侶が、一般の人々に代わって、世の罪を一身に背負い苦行を引き受ける者となり、苦行を修めて国家安泰等を祈願する法要である。約1ヶ月にわたる厳しい修練が続く荒行であるが、なかでも12日の夜半から若狭井からお香水を汲み上げる「お水取り」の行法が有名で、修二会としてよりも「お水取り」行事として全国的に知れわたっている。また修二会は開行以来一度も欠かされたことがない不退の行法であるといわれ、2004年で1,253回目を迎えることとなる。修二会の由来は、二月堂の開祖実忠和尚が天平時代に菩薩聖衆の十一面観音の悔過（けか）行法の様子を、人間界に再現し行ったのが始まりである。修二会の詳細についてはあまりにも多くの分野で紹介されているので、ここではその準備段階や行法について簡単に記述しておく程度にとどめたい。

修二会の準備

● 12月に開山堂（良弁僧正を奉る）でお水取りに参篭する11名の連行衆が発表される。●二月堂修二会別火坊に入る。日常使っている一切の火と別れる。新入と新大導師は（初めて大導師となる僧侶）は2月15日より参篭する。● 2月18日　二月堂南出仕口にて修二会の灯明に使う油量り（東大寺升）。●別火が始まると荷物が運び込まれ御祓いをして身を清める。●別火前半は試別火、後半は総別火が注連縄で結界を張り行われる。別火は本行に備えての精進、内陣の掃除、御輿を洗い清める。●練行の無事を祈り縁のある諸堂を巡拝する。この後試みの湯で心身を清める。●注連縄を張り結界し、清浄を保つ。●差懸の修理、内陣で履く修二会独特の履物。●椿の造花・南天の生け花・紙衣・法要に使う灯心を作る。●貝の吹き合わせ。法螺貝の稽古である。この他に**手しまの縁断ち（へりたち）**という中世から続く修二会独特の別火坊と別れる仕来たりがある。追い出し茶を飲み別火坊を出て、14日間の二月堂での修二会の本行に向かう。また深夜2時、今まで使っていた火はすべて消し、火打石で浄火を灯す。これがお松明の火種となりこれを一年間大切に使っていく。これを**一徳火**という。

修二会の行法（3月1日～14日）

大中臣の祓（おおなかとみ はらい）　俗に天狗寄せとよばれている。本行の始まる前日夕刻に行われる。天狗寄せには昔、毎年修二会の始まる頃から天狗が現れ嵐を起こし法要の邪魔をしたので、天狗を集めて祓い清めたという伝説がある。

授戒（じゅかい）　修二会の期間中の作法や戒めを確認し破らないよう戒める。

食堂作法（じきどうさほう）　正式には1日1食しか食事はできない。一汁一菜で皆のための祈りを捧げ、無言で食事をする。食事を終えた練行衆は懐紙に包んだご飯を若狭井の屋根に投げ、生飯（さば）として鳥に分け与えられる。昼ご飯のあとは一日の行が終わるまで水一滴すら飲めない。

開白法要（かいびゃくほうよう）　六時の行法と言い、六つの時間に合わせて法要をする。その年の一番始めに行われる日中の行のことを特に日中開白という。日中・日没・初夜・半夜・後夜・晨朝

三度の案内　参篭宿所と二月堂の階段をちょろ松明を掲げ、三度駆け上がり、駆け下りる。
一度目　時刻を聞きに上がる。二度目　練行衆が上がっていくことを予告する。三度目　練行衆が上がっていくことを知らせる。

走りの行法　天上界の一昼夜は娑婆界の四百年にあたるといわれ走らなければ追いついていけな

い仏の世界に身をもって体当たりする難行苦行である。

呪師作法　心身を清め行法に励む場は清らかでなければならない。悪魔や鬼神の侵入をふせぐ行法。（呪師とは、修二会で最も重要な役割をもつ四職の一人。四職とは練行衆に戒を授ける和上、修二会の最大目的である祈願をする大導師、密教的な修法をする呪師、内陣の鍵を管理して外部との渉外役をする堂司である。）

小観音（こがんのん練行）出御　修二会の本殿の観音御輿を迎える作法。安置され香炉、灯明、餅等が供えられる。

お水取り（3月12日）　お水取りの名称は、3月12日の真夜中、つまり13日の早朝、2時頃に行われる行事に由来する。二月堂下の閼伽井屋（若狭井）から本尊にお供の香水を汲み上げるための行法。詳細は次の「お水取り」で説明する。

以上が修二会の法要の準備から修二会の本行の主な内容である。11人の練行衆が民衆に代わって十一面観音に懺悔し悔過法要の難行苦行を代行することによって二月堂の本尊十一面観音は民衆とつながるとされているのである。大仏は国家の安泰を願い、二月堂の十一面観音は練行衆によって民衆とつながる。それが1200余年の間一度も途絶えることなく続けられて来た不退の行修二会である。（修二会の準備や行法の詳細は「東大寺お水取り―二月堂修二会の記録と研究」堀池春峰、1996、「お水取り」植田英介、川村知行、1995に詳しい。）

3)「お水取り」　若狭井（閼伽井屋）から香水を汲み上げる

若狭井がある閼伽井屋は二月堂舞台へのぼる青石段の左手、良弁杉の下方にある。屋形の屋根の両端には、閼伽井水（霊水）が湧き出した際に飛び立ったといわれる二羽の黒白の鵜の焼き物が置かれている。伝説の中の白と黒の鵜である。（写真2-③、写真2-①、②）

「お水取り」が行われる12日は全長8m重さ80キロもの籠松明が舞台にあがる。松明は上堂する練行衆の道明かりとして毎日上がるが、この日の籠松明は特別に大きい。この日境内は観光見物や近在の信者で一杯に埋めつくされ、お水取りが修二会全体の代名詞とされていることが納得できる。夕刻、信者から奉納された籠松明12本を堂童子が担いでのぼり二月堂舞台の回廊で大きく振り回す。その際に飛び散る火の粉を浴びると厄除けになるというので集まった群衆は競って火の粉を受けようとする。ついで後夜（ごや）の勤行の半頃13日午前2時頃）呪師（じゅし）を先頭に練行衆が牛王杖（ごおうづえ）をつき法螺貝を鳴らしながら、堂から青石段（本堂南石段）下の閼伽井屋に降り立ち香水を汲み取って二月堂の本尊十一面観音に供える。この往復には若狭遠敷の方角の向かい香水（閼伽水）の加持が行われる。この香水は若狭より送られる聖水とされ、それをいただくと諸々の病疫を免れるというので、昔から多くの近在の人々や信者が殺到する。この行事をお水取りとよんでいる。現在は3月13日に行われている。伝説ではこの若狭井の香水（閼伽水）はお水取りのときに限って湧き、いつもは井戸に水は湧かず涸れているという。この日汲み上げられた香水は一年分のお供水として須弥壇の香水壷に蓄えられ、若返り、延命、病除けの聖水となり、諸々の病疫を退散させる霊水として信者にも分け与えられている。（これらの聖水としての効能は前述の東大寺要録（図1-④部分）にもすでに記されている。）そして現在にいたるまで民間信仰として畿内の人々に伝わっている。香水壷は毎年注ぎ足されて補充され貯められて来たものと、昨年一昨年に汲み上げられた香水を入れてある香水壷とがある。前者を根本香水と言い、1200有余年前からの水ということになる。新しい香水壷の中にも根本香水を少量分け入れるというので同様に1200何年前からの香水となるわけである。

折口信夫は、若水信仰はわが国固有のもので、常世に通じている地下水だとし、お水取りは若

狭の池（一の宮境内の池）の水を呼び出すのだという。1200有余年にわたって連綿と続けられてきたお水取り行は、信仰の儀式、水の祭祀を超えて日本人の生活文化に根を下ろしているものといえよう。

4）お香水・霊水・民間信仰の水・一徳火・大松明（二月堂の十一面観音は民衆と繋がる。）

若狭井から汲み上げられた（閼伽井水）香水は二月堂の本尊十一面観音に捧げられるだけではなく、信者にも配られ一年間信仰の水として使われるという。前述したように本尊にお供えしたこのお香水は、諸々の病疫を祓い、病人に飲ませるといかなる病気にも効き目がある聖水として信者に分け与えられ民間信仰として伝えられている。また走り行の後で参詣の人達の手に2，3滴ずつ分けて頂戴したりする。（柄杓で僧侶から信者や参詣者の手に、聖水が配られる様子は植田らの「お水取り」の掲載写真に詳しい。」またお水取りの後深夜の二月堂で行われる火の行、韃靼（達陀）（「だったん」はサンスクリット語の「焼き尽くされるもの」を意味する「ダッタ」に由来するという。）の妙法で使われていた韃靼帽を子供にかぶせてもらうと子供の除病延命になり、悪病を除け健康に育つと伝えられており、その日の朝は近郷近在の親子連れが大勢集まる。さらに信者から奉納された籠松明を堂童子がかついでのぼり、二月堂の舞台の上で大きく振り廻す際に飛び散る火の粉を浴びると厄除けになるというので、参観者はその近くに殺到する。修二会「お水取り」行のクライマックスとなるのである。

お香水は霊水・民間信仰の水として、一徳火は一年間の火種となり、籠松明の火の粉は厄除けとして民衆の生活の中で必要とされ続けて来た。時代とともに受け入れられる形を変えながら。二月堂の十一面観音は練行衆の荒行を通して民衆と繋がるだけではなく、民間信仰として、あるいは日常生活の拠り所として天平の昔から連綿と民衆の生活の中に溶け込んでいるのである。

3.まとめ

若狭井伝説をもとに若狭から奈良へとつながる水の神事、水の祭祀の実地見聞から次のことがまとめられる。

(1) 若狭井伝説の水源地　鵜の瀬

若狭井伝説の水源地鵜の瀬は遠敷川の上流にあり、透明度の高い清冽な渓流であった。送水神事が執り行われる深淵の岩場には大きな穴があり、注連縄で結界されている。その岩の下方の水中洞穴が二月堂の若狭井と繋がっているとされている。この水中の穴から鵜が奈良までもぐって行ったと伝わっている。二月堂若狭井に遠敷川の水が湧き出たのと時を同じくして、鵜の瀬では群れをなして泳いでいた鵜の姿が消え、瀬から下流の水が途絶えたという。以来この川を音無川と呼ぶようになったという。こられのことは12世紀初期に編纂された東大寺要録に記されたことと一致しており、この伝説信仰から地元では毎年3月2日夜この淵で根来八幡の神人と神宮寺僧が神仏混淆の「お水送り」神事を行っている。

奈良東大寺に伝わる若狭井伝説はその井戸の水源地とされる若狭鵜の瀬においても伝説信仰が伝承されていた。清流と鵜と水中洞穴、後は水脈がつながれば伝説は現実のものとなるかも知れないなどと考えたくなるほどの伝説の水源地が実在していた。

(2) 若狭神宮寺では

神宮寺が位置する若狭遠敷は京都、奈良までは百キロほどの直線上にあり、さらに鯖街道根来道は都への最短距離にあった。この地方を拓き国造りした遠敷明神を祖先神とする（直孫）和朝

臣赤麿公が遠敷明神のお告げによって寺を建て薬師如来と十一面観音を祭り、祖先神の遠敷明神を迎え神仏両道の道場となった。これが若狭神願寺（神宮寺）の起源である。薬師如来の化身が遠敷明神の若狭彦神、十一面観音の化身が若狭姫神であるとされる。鎮座する神々と仏像を祀る神仏両道・混淆の寺の起源は古代の神々にまで遡る。神宮寺の本堂は神仏混淆の異空間ではなく、日本の信仰・文化のルーツを顕著に現しているものと考えられる。神も仏も共に祭られている日本の多くの家の形式そのものといえよう。

(3) 遠敷明神

遠敷明神は鵜の瀬の根来白石に唐服で白馬に乗って降臨したと伝えられ、若狭彦神、若狭姫神の二神である。祭神は彦火火出見尊（ヒコホホデノミコト）・豊玉姫命（トヨタマヒメノミコト）で夫婦神である。豊玉姫命は海神の娘であり、古代神話の水神と繋がる。前報告の貴船に登場した玉依姫命（タマヨリヒメノミコト）は妹神にあたり、阿蘇の健磐龍命は水神であった。これらの古代の人々により創造された神々は、国を拓き豊穣を祈願する対称として場所を変え姿を変えて具象化されて来た。遠敷明神も白石明神として遠敷根来白石の里（遠敷は若狭国府であった。）に国を拓き五穀豊穣を祈願する農耕神として鎮座したとされる。古代の水の神はここでも伝承の中で繋がっていることが明らかである。

(4) 良弁杉伝説

良弁の生誕伝説は諸説があるが、神宮寺寺誌に載せられているように、神願寺（神宮寺）の開山赤麿公（和氏＝鷲）が白石の長者の神童（幼児＝良弁）を大和の名僧義淵僧正（大樹＝杉）に託し、後に東大寺開山良弁僧正になられたという記述は、若狭は大和の荘園であったなど東大寺と若狭の経済的かかわりを考えると良弁杉伝説のルーツと推察される。

(5) 二月堂お水取り・修二会の行

印度の渡来僧実忠が創始した修二会の法要は、11人の練行衆が民衆に代わって十一面観音に懺悔し、悔過法要の苦行を代行することによって二月堂本尊十一面観音は民衆と繋がるとされ、それが1200有余年の間一度も途絶えることなく続けられ今に伝えられて来ている。この不退の行の一つである「お水取り行」は修二会全体の代名詞となるほど全国的に有名である。外来文化である仏教が若狭から奈良へと伝えられ日本の文化に融合し根を下ろした。そして民間信仰としても民衆の生活の中に受け入れられ、不退の行として伝承され続けているということを確認した。1200有余年にわたって連綿と続けられてきたお水取り行は、信仰の儀式、水の祭祀を超えて日本人の生活文化すなわち民俗文化として根を下ろしたものといえよう。

(6) お香水・霊水・民間信仰

若狭井から汲まれたお香水は霊水・民間信仰の水として、一徳火は一年間の火種となり、韃靼の火の行に使われた韃靼帽は子供の除病延命に役立つとされ、また籠松明の火の粉は諸々の厄除けとして民衆の生活の中で必要とされ続け伝承されて来た。二月堂の十一面観音は練行衆の荒行を通して民衆と繋がるだけではなく、民間信仰として、あるいは日常生活の拠り所として天平の昔から連綿と民衆の生活の中に溶け込んでいるように思えた。

おわりに

神・仏と水神のルーツそして民俗文化の創造

若狭井伝説をもとに若狭から奈良へと繋がる水の神事、水の祭祀を追及してきた。お香水に象徴されるように、若狭から奈良へは大陸文化伝承道であり、仏教伝来の道でもある。大陸から伝

承された仏教文化は若狭から、その昔若狭の国府であった遠敷根来を起点として鯖街道(若狭街道)を通り奈良の都へと伝承された。そして寺院から民衆の生活へ繋がり日本の基層文化と融合した。海を渡って唐から伝承された十一面観音もこの伝通路にあたる若狭街道に多くみられる。神宮寺寺誌によれば実忠は十一面観音の熱心な信仰者であり、生きた十一面観音を求めて渡来し、一時期神宮寺で十一面観音悔過を修法していたとされている。若狭と奈良（大和）両地の関係を語る史料は乏しいが、若狭は大和の荘園支配にあった背景があるとも伝えられ、海産物や塩などの食料供給地であった。また大仏建立に当たり、金箔を塗布する鍍金の際に大量の水銀を必要とし、遠敷根来は水銀を産出することからその供給源であったという。さらには水銀による汚染を還元するために遠敷の清浄な水源からの送水願望によるとされるものや、インドからの渡来僧実忠は水路を引くカナートの技術者であったなど両地の関わりには諸説の推論がある。しかしお水送りとお水取りの神事、水の祭祀が若狭井伝説をもとに両地で厳粛に行われていることは確かな事実である。

吉野裕子は著書「隠された神々」の中で神を捉える日本的発想について次のように述べている。「想像力は人類に共通して与えられている能力であるが、その想像力を駆使して各民族がつくり描く神話、世界像、文化の型は決して同一ではない。古代日本人は抽象的な思惟を苦手とし、物事を理解しようとするとき、それを何かに擬え、それからの連想によって捉えようとした人々だったと思う。この傾向が神話・信仰・世界像を創造し、神事から諸種の芸能へと発展させてきたのである。」と鋭く洞察している。これは現在に伝えられる神事のルーツを理解するヒントを提示しているものとして重要である。古代の人々は創造の水神に豊穣を祈り、ある時代にはそれが唐服を着た遠敷明神となり、さらに外来仏教の十一面観音となる。そして神仏が混ざり合いながら、日本の基層文化に融合同化され民衆生活の中に受け入れられてきた。お水送り・お水取りの神事は伝説で繋がるまさに神仏混淆の水の祭祀といえよう。

2003年のお水送り、お水取り行法の祈りは、共に世界平和と五穀豊穣の祈願法要であった。1200余年続いた火と水の祭祀の祈りは、時を越えて根源的な人々の生活の中から引き起こされる問題を提起しているのではないだろうか。

付記 ： 最後に送水神事についての資料提供や遠敷根来の伝承等について丁寧なご説明を頂いた鵜の瀬資料館長原井太夫氏に深謝いたします。

参考文献

1）佐藤ひろみ、水神のルーツと生活文化、生活科学研究第23集、(2001)
2）筒井英俊校訂、東大寺要録、国書刊行会、(2003)
3）古家信平、火と水の民俗文化誌、吉川弘文館、(1994)
4）福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司他、日本民俗大辞典上、吉川弘文館、(1999)
5）福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司他、日本民俗大辞典下、吉川弘文館、(2000)
6）大塚民俗学会、日本民俗事典、弘文堂、(1991)
7）若狭神宮寺別当尊護記、お水送りとお水取り、寺誌第1集、(2000)
8）吉野裕子、隠された神々―古代信仰と陰陽五行―、人文書院、(1992) 2000
9）吉野裕子、陰陽五行と日本の民俗、人文書院、(1983) 2000
10）小浜市教育委員会、小浜市史　通史上巻、小浜市、(1998)
11）小浜市教育委員会、小浜市史　通史下巻、小浜市、(1992)

12）原田敏明他、日本民族学大系第8巻、信仰と民俗、平凡社（1985）
13）関　敬吾他、日本民族学大系第13巻、日本民族学の調査方法、平凡社（1985）
14）安津元彦・梅田義彦、神道辞典、堀書店（1967）
15）山折哲雄・宮田　登、漂白の民族文化、日本歴史民俗論集8、吉川弘文館、（1994）
16）宮田　登・塚本　学、民間信仰と民衆宗教、日本歴史民俗論集10、吉川弘文館、（1994）
17）山折哲雄・宮本袈裟雄、祭儀と呪術、日本歴史民俗論集9、吉川弘文館、（1994）
18）倉林正次、日本まつりと年中行事事典、おうふう、（1983）
19）石上　堅、日本民俗語辞典、桜楓社、（1992）
20）折口信夫、河童の話、折口信夫全集第3巻、（1995）
21）植田英介・川村知行、お水取り、保育社、（1995）
22）小椋一葉、覇王転生　十一面観音とニギハヤヒ、河出書房新社、（1996）
23）佐藤道子、悔過会と芸能、法蔵館、（2002）
24）堀池春峰、東大寺お水取り―二月堂修二会の記録と研究、小学館、（1996）

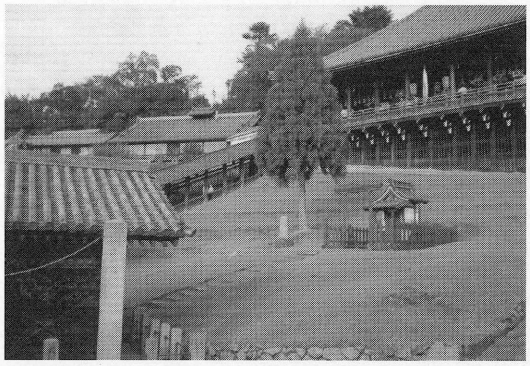

写真1-①　東大寺二月堂舞台下の良弁杉と閼伽井屋

写真1-②　舞台・良弁杉・興成社・青石段

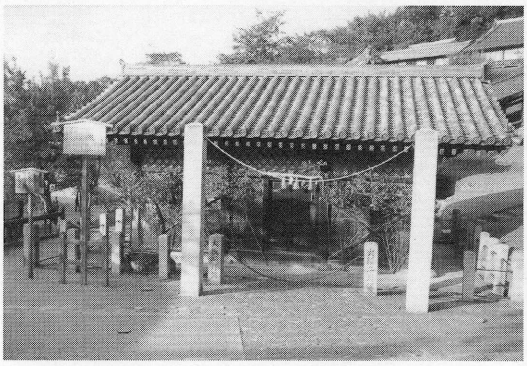

写真2-①　二月堂閼伽井屋若狭井
四周を榊で囲み結界（閼伽井屋飾り）

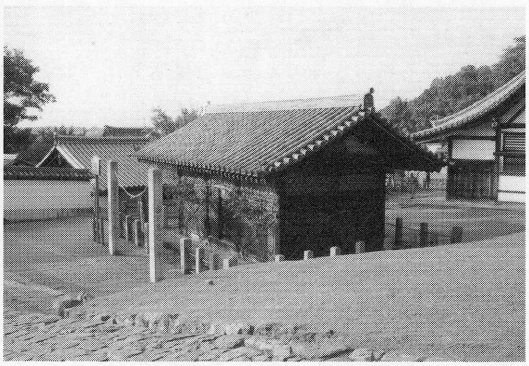

写真2-②　閼伽井屋側面
（参籠宿所右側・仏餉屋左側）

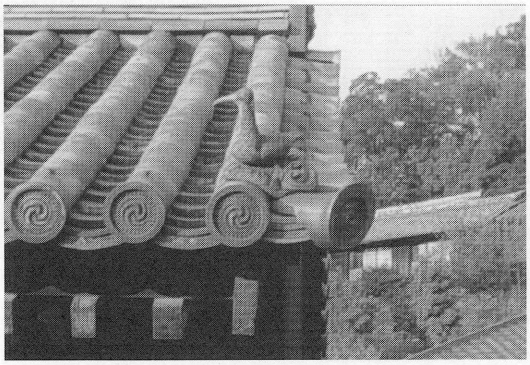

写真2-③. 閼伽井屋　伝説の鵜
（屋根両端に白黒二羽）

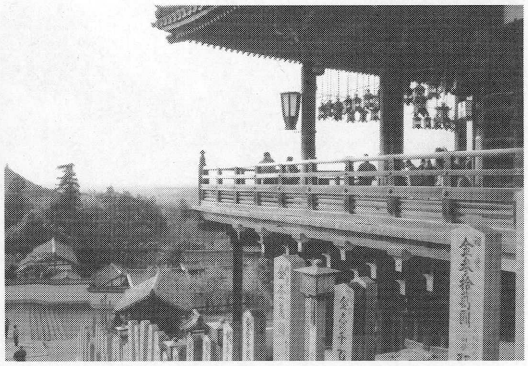

写真3　二月堂舞台（本堂南青石段側）

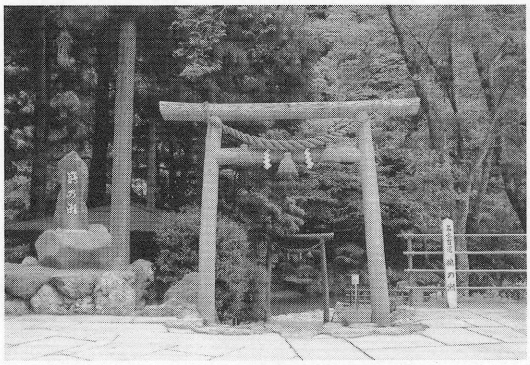

写真4-①　鵜の瀬の神域へ導く鳥居

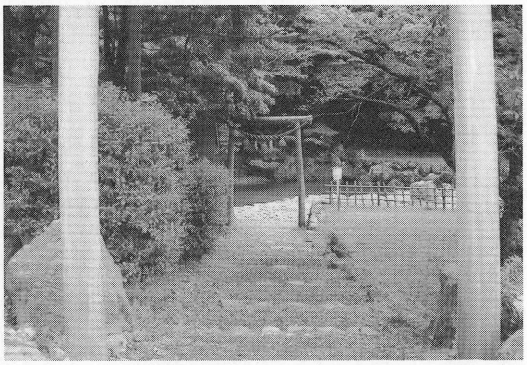

写真4-②　鳥居の先は鵜の瀬の清流

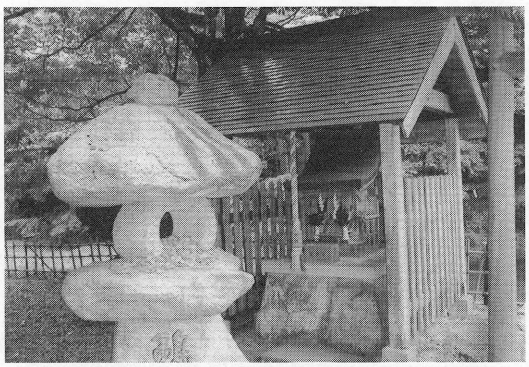

写真4-③　神域鵜の瀬入口の石碑と社

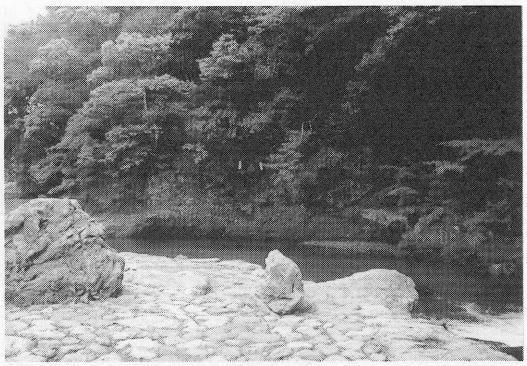

写真5-①　注連縄が張られている岩穴
（この下方に水中洞穴がある。）鵜の瀬

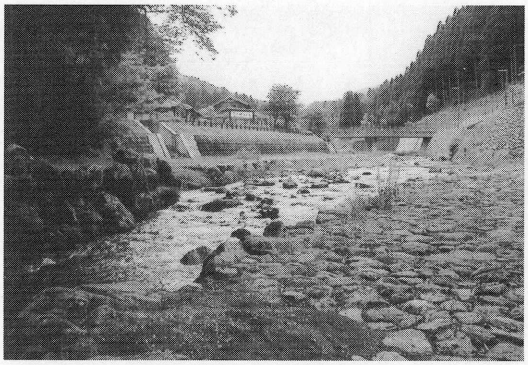

写真5-②　鵜の瀬の河原
（対岸の岩場で送水神事が行われる）

写真5-③　送水神事が行われる岩場
（屈曲した所）

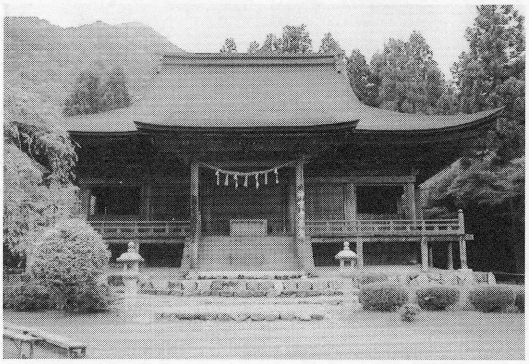

写真6　若狭神宮寺（注連縄で結界される本堂）

写真7　神宮寺境内
（スダジイの巨木・閼伽井屋・護摩壇）

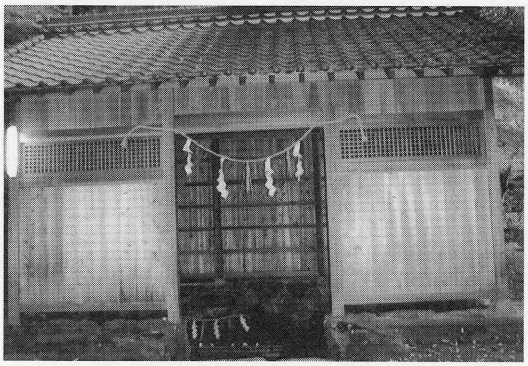

写真8-①　若狭神宮寺の閼伽井屋
（湧水の井戸を覆う屋形）

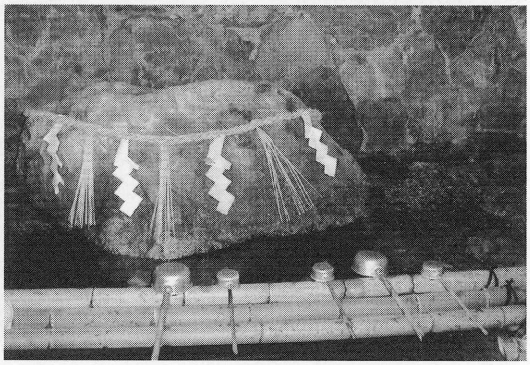

写真8-②　閼伽井屋に湧く湧水
（大石は注連縄により結界）

写真９　良弁和尚生誕の石碑

写真10　若狭一の宮（彦姫神）飛地境内
遠敷明神降臨の地（鵜の瀬）

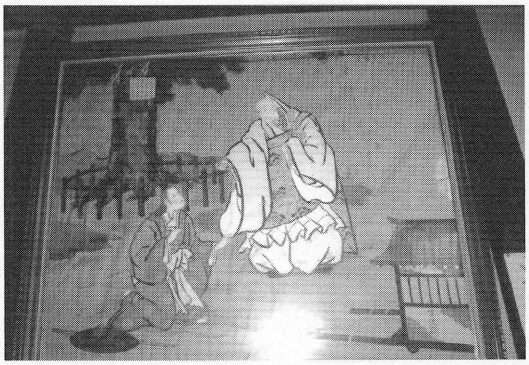

写真11　良弁杉伝説の絵画（二月堂参籠所）
（歌舞伎演目　二月堂と良弁杉由来）

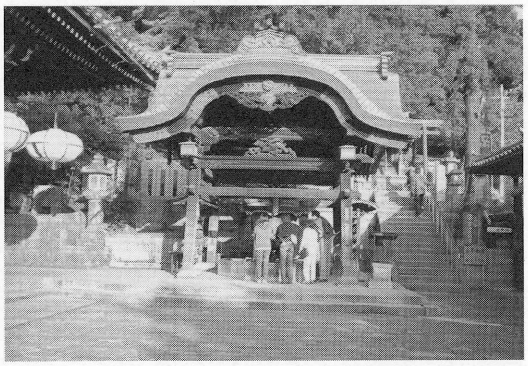

写真12-①　二月堂御手水舎

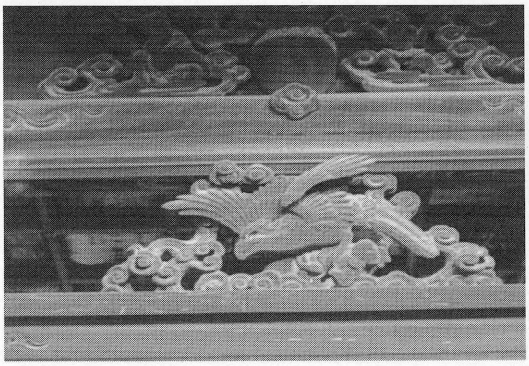

写真12-②　鷲にさらわれる幼児
（二月堂御手水舎の梁に彫られた良弁杉伝説）

写真13　遠敷明神の社
（二月堂の北東山手の一番高い石段の上に
奉られている）